

インド佛教史への道しるべ

佐々木教悟

—

インド佛教史とは、紀元前六世紀の後半に (L'Inde classique Tome I, 1947, p. 267 によれば、ゴータマ・ブツダの年代は前五五八—四七八年とされている) インドのマカダの地に出現した佛教が、そののち発展して、インド半島全体に歴史的な展開をとげたあとを調査研究して、それを記述する学問のことであるが、一口に佛教史学といっても、佛教の精神が種々なる文化現象としてあらわれたあとを研究するものであるから、たといインドという地域的限定をおこなったとしても、きわめて複雑なものであり、そこにはまたいくたの分野があることはいまでもない。すなわち、宗教史、哲学史、精神史、思想史などとよばれているもの、あるいは経典成立史、教団史

などとよばれているもの、さらに文学史、美術史などとよばれているものなどがそれである。そしてこれらの各分野は、相互に関係し交渉し合っているために、一つの分野をとりあげたからといって他の分野をまったく無視するわけにはゆかないものである。そこで、全体をまとめて、すべてを文化現象として把握する立場から、佛教の歴史を佛教文化史の名のもとに叙述することもおこなわれている。たとえば、中野義照著「佛教文化史概説」(上下二冊、高野山出版社、昭和二四年)は初歩のものを対象にした好適のものである。しかしながら、往々にして難解な佛教の術語がなんらの解説なしにそのまま使用されているために、佛教辞典を手許におくことが必要であろう。

ところで、この「佛教文化史概説」は、インドを主と

なしつつも、アジア全地域における佛教の展開をとりあげている点で注目されるが、たんに地域的にとりあげるということのみでなくして、われわれがこれまでそまつ

て把握されるとともに、アジアの文化に寄与した佛教の役割が正当に評価されている。

にしてきた世界的なものの見方、あるいは現代的なもの

二

の見方と取組むべきであろう。それが歴史を学ぶものの態度であるとおもわれる。したがって、インドの佛教史に関心を寄せるものは、世界思想史の視野の中でインドを理解し、インドのところに触れてゆくことが求められる。そのことはやがて人間そのもののあり方をもあきらかにすることになるであろう。この観点から、シルヴァンレヴィの「佛教人文主義」(Sylvain Lévi: L'Inde et Le Monde, 山田龍城訳、大雄閣書房、昭和三年)ならびに「インド文化史」(L'Inde civilisatrice aperçu historique, 山口益・佐々木教悟訳、平楽寺書店、昭和三年)、さらに講演の和訳ではあるがルネ・グルッセの「新ヒューマニズム」(René Grousset: Riem d'humain ne nous et étranger, Il est à nous tous notre commun patrimoine, 宮本正清訳、弘文堂アテネ文庫94、昭和二五年)の一読をすすめたい。ここでは、佛教とバラモン教とが〈母なる地〉のインドを舞台として、平和裡に共同作業をなした点がとくに留意されているが、そのことがインドのヒューマニズムとし

さて、インド佛教史を研究の対象とする場合でも、インドの風土、国家、政治、経済、社会、言語、民族などに無関心であるわけにはゆかないし、一般史に関するおおよその知識と理解とをもたねばならぬことはいうまでもない。そこでその意味での参考書としては、辻直四郎編「印度」(南方民族叢書、偕成社、昭和一八年)をあげておこう。この書物は、インドの種族、言語、社会習俗、宗教、文学の概観を与えるものとして信頼できるものである。

一般インド史の入門書、ならびに概説書、時代史、地方史などに関しては、岩本裕著「インド史」(修道社現代選書、昭和三二年)の巻末附録「インド史研究ノート」や江口朴郎・蠟山芳郎・岡倉古志郎監修「アジア・アフリカ研究入門」(青木書店、一九六二年)のV「インドおよびパキスタン研究入門附録の参考文献をみるとよいし、さらに専門的な解説をふくめたものを必要とするならば、「東洋史料集成」(平凡社、昭和三二年)の第六篇「インドの部

三

(三六九頁以下)をみればよからう。ただここでは、初歩の人がひとたびひもとけば、例外なく研究意欲をおこし、ひじょうな感銘をうけるにちがいないとおもわれるものをあげておくにとどめよう。それはパニツカルの「インド歴史」(K. M. Panikkar: A Survey of Indian History. 坂本徳松・三木亘訳、東洋経済新報社、昭和三四年)とネールの「インドの発見」(J. Nehru: The Discovery of India, New Delhi 1946. 辻直四郎・飯塚浩三・蠟山芳郎訳上巻一九五三年、下巻五六年岩波書店)とである。両書ともインド人で政治家外交官でありながらまた、非凡な学者でもあった人の手になるものである。前者はすぐれた歴史観にもとづいて、きわめて豊富な事実を実証的に整理しつつ、インドがあのゆんできたみちをあきらかにするとともに、現在のインドのすがたを見つめ、将来への展望をのべている。後者は本来の意味における歴史書ではないが、インドの歴史を幅広く概観し、インドの多様性と統一性などに對する考察を主軸にして、世界史の立場からインドを位置づけようとしたものである。ともにすぐれた知性のひらめきのあいだに、民族的なたましいのうったえがよみとられる。

予備的な工作はそのくらいにして、この広汎なインド佛教史に立ち向うにあたって、さしあたりどこから手をつけたらよいかとまどうのであるが、われわれは一つの手がかりとして、水野弘元著「印度佛教史の性格」(佛敎標準叢書、鹿野苑、昭和二七年)をとりあげたい。この書物は小冊子ながら、八道しるべの役目を充分にはたしてくれるものとおもわれるからである。すなわち、初めに(一)インド佛教史のおおよその展望をあたえて、その輪郭を示し、つぎに(二)インド佛教の性格を論じている。この場合、インド一般に共通する性格と佛教のみに見られる特徴的性格とをあげて、佛教の特色がどこにあるのかという点を明解にのべている。つぎに(三)佛法の整備と部派の分裂について叙述するが、ここではとくにブツダの教法が、いかに維持せられていったかというところに焦点をおいている。つぎには四佛教外護の諸王と東西文化の交渉について論じ、佛教が地域的に発展して、やがて国際的な舞台に登場するにいたるプロセスをのべ、そのことを推進せしめていった諸要素を政治の動きや文化の交流にからませている。そのつぎには(四)大乘佛教

の興起の問題をとりあげ、部派佛教の傾向ならびに部派小乗と大乘との相違点を論じている。そして(内)哲学的佛教としてアビダルマ佛教や大乘の中観思想、唯識思想などに対する概観をあたえ、大乘小乗を通じて佛教が緻密詳細な哲学理論を展開せしめるにいたった理由について論じている。最後に(外)真言密教の興起と佛教の滅亡について考察し、学問的理論佛教とちがって、佛教の深遠な哲学を内部におさめながらも、これを難解な理論によらずして、具体的な象徴によって表現しようとした真言密教の宗教性をあげ、しかもそのような佛教が何故に墮落し滅亡するにいたったかという理由についてのべている。

以上がこの小冊子のあつかっているおおよその内容であるが、一応この(一)から(外)までの区分にしたがって、これまでで発表されている参考文献を中心にのべてみたいと思う。

四

(一)最初に土地と環境を知るためには地図が必要であるが、入手し易いものとしてオクスフォードの「スカール・アトラス」(The Oxford School Atlas for India,

Pakistan, Burma & Ceylon by John Bartholomew, Oxford University press)と「アジア歴史地図」(松田寿男・森鹿三編、平凡社、昭和四二年)とをあげておこう。

つぎにゴータマ・ブッダの生涯を知るためには佛伝関係の文献を読まねばならないが、阿含、律藏などの漢訳ならびにパーリ語の古資料によるものとして赤沼智善著「阿含の佛教」(丁子屋、大正一〇年) サンスクリット語およびパーリ語ならびに漢訳の原始聖典の資料のみで佛伝構成をこころみたものとして中村元著「ゴータマ・ブッダ「釈尊伝」」(法藏館、昭和三三年)、学問的な信頼度が高くて、しかも諸種の伝説を重んじて通俗平易な佛伝を構成した水野弘元著「釈尊の生涯」(春秋社、昭和三五年)をあげておこう。数多い欧文のものの中ではテキストと考古学的資料にもとづいたフーシェの「ブッダの生涯」(A. Foucher : La Vie du Bouddha d'après les Textes et les Monuments de l'Inde, Paris 1949) は出色のものである。この他に、古いものではあるが、七十五葉の挿図を用いて、その挿図ごとに図解と参考文献とをあげて佛伝を構成した堀謙徳著「美術上の釈迦」(博文館、明治四三年)は、岩波の「佛陀の生涯」(岩波写真文庫一八一、一九五六年)とともに一読をすすめたものである。し

かしながら最近では、佛伝関係の經典の原典からの和訳が「南伝大藏經」所収のもの以外に、あたらしく読みやすいかたちで提供されているから（佛典—世界古典文学全集6、筑摩書房、昭和四一年）、直接に經文そのものを味読することが望ましい。このことは、後述の佛教の思想や教義を学ぶ場合でも同じである。

五

つぎにインド佛教史全般をあつかうものとしては、龍山章真著「印度佛教史」（法藏館、昭和一九年）や佐々木教悟・高崎直道・井ノ口泰淳・塚本啓祥著「佛教史概説インド篇」（平樂寺書店、一九六六年）があり、また中村元著「インド思想史」（岩波全書二二三、岩波書店、一九五六年）や金倉円照著「インド哲学史」（平樂寺書店、一九六五年第三刷）は、佛教のみをあつかったものではないが、初步のものが佛教以外の他の宗教や哲学が発展してゆくなかで佛教がいかなる展開をとげたかを知るのに便利なのである。

ところでさらに一步進んで詳細なものをとということになると、われわれはラモート教授の「インド佛教史」（E. Lamotte: *Histoire du Bouddhisme indien*, Louvain 1958）

をあげなくてはならないであろう。この書物は、まだ完結したものではないが、筆者がかって紹介したごとく（ラモートのインド佛教史に関する業績）アジア・アフリカ文獻調査報告第8冊「言語・宗教2」、アジア・アフリカ文獻調査委員会、一九六四年）、その資料の整理・分析からいっても、厳密な考証、透徹せる史観からいっても、現在にあっては、この書物の右にでるものはおそらくないとおもわれる。

この他に、まさしくインド佛教史と名づけたものではないが、フィリオザ（J. Filliozat）教授の執筆になる「佛教」（Chapitre XI, *Le bouddhisme* (§ 1929-2386), *L'Inde classique Tome II* pp. 315~608, Paris—Hanoi 1953）は、考古、貨幣、碑銘、言語等の諸資料、パ・梵・漢の佛典、ブッダの生涯、佛教史の輪郭、教義の概要、教団、儀式などに関するのべたもので、そこにはヨーロッパの諸学者のこれまでの研究を集約したものが示されている。この意味で、ぜひ一読しておきたいものである。

つぎに通史ではなく、また佛教のみをあつかったものではないが、佛教の社会性に関心をおくものとして、中村元著「インドの古代社会」（アテネ文庫二六三、弘文堂、昭和三〇年）がある。これは小冊子であるが、グプタ朝

時代までをあつかった一種の社会史ともいふべきもので、きわめてユニークな研究であるとおもわれる。この研究を一層充実せしめたものが、同じ著者の「インド古代史」(上、下、春秋社、昭和三八、四一年)である。およそ佛教の歴史は、その背景である社会や民衆の経済生活を無視してかかんがえることのできないものであり。そのことは教団の歴史をみればわかることである。この観点からコーサンビー著「インド古代史」(D. D. Kosambi: The Culture and Civilization of Ancient India in Historical Outline, London 1965 山崎利男訳、岩波書店、昭和四一年)は、あたらしい研究領野を開拓したものと、いってよい。「佛教学セミナー」第5号掲載の書評を参照のこと)。けれども唯物史観の立場に立つての研究は、一つの立場ではあっても、それがすべてを代表する立場であると即断することは軽率であろう。ましてや佛教史学にあつては、その立場に立つての研究はまだ緒にいたばかりであるから、初学者は先ず前述の「インド古代社会」を手がかりとして、どこに問題があるかを見きわめ、古くは増谷文雄著「佛陀時代」第二編経済、社会、政治事情に関する資料(春秋社、昭和七年)、近くは雲井昭善著「佛教興起時代の思想研究」第四章佛教興起の社会的基盤(平楽

寺書店、一九六七年)などで、それをたしかめつつ、着実に一歩一歩前進してゆくべきであろう。

哲学史としては、金倉円照著「印度哲学史要」(弘文堂、昭和三年)ならびにその改訂版「インド哲学史」(平楽寺書店、一九六五年)が初歩向きであるが、これはインドの古代思想を一応学派ごとにあつかったものである。従来、インド哲学史といえば、異口同音に宇井伯寿著「印度哲学史」(岩波書店、昭和七年、昭和四〇年再版)が標準的概説書としてあげられてきたが、それは専門的な用語の石垣でかためられた城のようなもので、なかなか近寄りがたいものであった。そこで精神史あるいは思想史と名づけるものがあらわれて、一種の魅力的な親近感をあたえたようである。精神史としては、金倉円照著「印度古代精神史」(岩波書店、昭和一四年)、同「印度中世精神史」(上、昭和二四年、中、昭和三七年、岩波書店)があるが、前掲の(二)(三)(四)の部門を研究するのに欠かせないものといつてよい。思想史としては、中村元著「インド思想史」(岩波書店、昭和三五年)があり、簡にして要をえた好著であるから、全体の輪郭を知るために役立つものとおもわれる。

文学史としては、エム・ウィンテルニッツ著「印度佛教

文学史」(M. Winternitz: Geschichte der indischen Literatur, Zweiter Band. Die buddhistische Literatur, Leipzig 中野義照・大佛衛共訳、丙午出版社、大正十二年)、泉芳環著「佛教文学史」(上下、佛教大学講座、佛教年鑑社、昭和八年)などがあるが、あわせて田中於菟弥著「インドの文学」(世界の文学史9、明治書院、昭和四二年)の一読をおすすめしたい。

また、美術史としては逸見梅栄著「佛教美術史」(上中、佛教大学講座、佛教年鑑社、昭和八年)、高田修著「印度・南海の仏教美術」(創芸社、昭和一八年)などがあるが、逸見・高田著「印度美術史」(創芸社、昭和一九年)や上野照夫著「インドの美術」(中央公論美術出版、昭和三九年)もかかすことのできないものである。

六

(二)主として原始佛教の教義を中心に佛教の特色をのべたものに水野弘元著「原始佛教」(サーラ叢書4、平楽寺書店、昭和三二年)があり、ブッダにおける出家および修行のありかたや特質をのべたものに増永靈鳳著「根本佛教の研究」(風間書房、昭和三三年)がある。また初期教団の組織や運営については、渡辺棟雄「釈尊とその教団」

(講座佛教Ⅲインドの佛教所載、大蔵出版株式会社、昭和三四年)ならびに宇井伯寿「僧伽」(岩波講座倫理学第四册所載、岩波書店、昭和十五年)などがあるが、教団史の研究は最近とくに活潑で、平川彰著「原始佛教の研究」(山喜房書林、昭和三九年)など、参考書にことかかない。この方面に関心をもつ人には中村元「形成途上の教団」(芳村修基編「佛教教団の研究」所収百華苑、昭和四三年)ならびに佐藤密雄「原始佛教の教団理念——律蔵における僧伽——」(前同)の一読をおすすめしたい。外国の学者のものでは Sukumar Dutt: Buddhist Monks and Monasteries of India, their History and their Contribution to Indian Culture. London 1962 が、とても便利である。

(三)つぎに結集や部派の分裂に関する分派史については、水野弘元「佛教の分派とその系統」(講座佛教Ⅲインドの佛教)を、そしてすこし進んでは、前出の金倉円照著「印度中世精神史」中巻の第九章以下第十三章までの所論を参考とすることができる。外国の学者の研究もずいぶん多く、なかでもフラウワルナー(E. Frauwallner: The Earliest Vinaya and the Beginning of Buddhist Literature. Serie Orientale Roma. III. Roma 1955)やバレー(A. Bareau: Les premiers conciles bouddhiques. Annales du Musée Gui-

met, Bibliothèque d'Etudes, LX, Paris 1965) などの研究には注意する必要がある。

(四) アショーカ王の法勅ならびに法勅のもつ歴史上の意味については、宇井伯寿「阿育王刻文」(印度哲学研究第四、甲子社書房昭和二年、岩波書店、昭和四〇年再版)、および前掲の金倉円照著「印度中世精神史」上、第六章を参照すべきであるが、その時代の資料の所在や資料上の価値などを論じたものとしては、中村元「古代インドの社会的現実——マウリヤ王朝時代研究資料——」(佛教学研究四・五・一〇・一一、昭和二五、二六、三一、三三)をあげることが出来る。この論考はたんに碑銘ばかりでなく、貨幣や考古学的美術的遺品、西方の古記録等にもふれている。また、マウリヤ王朝時代の佛教と国家権力、政治理念などの問題に関しては、前出の中村元著「インド古代史」上、第三編ならびに同じ著者の「宗教と社会倫理」(岩波書店、昭和三四年)を読むのがよい。

佛教外護の王の一人とされるカニシカ王に関する研究は、歴史的にあって、実のところまだ未知数である。したがってこの部門は前途洋々たるものがある。ところで、近頃やかましい、いわゆるシルク・ロードをめぐる問題ととりかかるとは、小冊子ながら、伊瀬仙太郎著「東西

文化の交流」(アテネ文庫二三九、弘文堂、昭和三〇年)によっておおよその知識をえて、それからインドとヨーロッパ、インドと中国のあいだの文化の交流したあとをたずねるがよい。文献の所在などについては、前出のシルヴァン・レヴィ「インド文化史」第三章インド・ギリシア時代、第四章スキタイ世界に対するシナの圧迫、第五章インド・パルティアとインド・スキタイの各章末の註記にしるしてある。そこにあげていないものでは、中村元著「東西文化の交流」(中村元選集第9巻、春秋社、昭和四〇年)、同「インドとギリシアとの思想交流」(中村元選集第16巻、春秋社、昭和四三年)、中村元・早島鏡正訳「ミリンダ王の問い」1、2、3(東洋文庫7・15・28平凡社、昭和三八年—三九年)などがあるが、とくに最後のものには第一冊と第三冊との末尾に親切な解説がつけられている、初学者には便利である。

(五) 大乘佛教の興起に関しては、宮本正尊著「大乘と小乘」(八雲書店、昭和一八年)、宮本正尊編「大乘佛教の成立史的研究」(三省堂、昭和二九年)などがあり、さらに一層詳細なものであらゆる問題に対する考察をふくめたものとして山田龍城著「大乘佛教成立論序説」(平楽寺書店、昭和三四年)がある。また主として教団史的研究をな

したものに平川彰著「初期大乘佛教の研究」(春秋社、昭和四三年)があり、大乘佛教興起時代の社会を考察したものに、中村元「大乘佛教興起時代の社会構成」(「インド古代史」下、第四編第五章、第五編第七章)がある。

(六)アビダルマの佛教に関しては、佐々木現順著「佛教における有の形而上学」(弘文堂、昭和二四年)やシチェルバトスロイ著「小乗佛教概論」(The Central Conception of Buddhism and the Meaning of the Word Dharma, Royal Asiatic Society, London 1923 金岡秀友訳、理想社、昭和三八年)などがあるが、最近には「存在の分析へアビダルマ」と題して佛教の哲学体系のなかで、これを思想として論ずることもおこなわれている(桜部建・上山春平著、角川書店、昭和四四年)。

大乘の中心思想としての中観や唯識や如来蔵説に関しては、山口益著「般若思想史」(法蔵館、昭和二六年)がもっとも手ごろな指針をあたえてくれるものであるが、同じ著者の「大乘の佛道体系」(山口益・横超慧日・安藤俊雄・舟橋一哉著「佛教学序説」平楽寺書店昭和三十六年の第四章)はぜひ一読せねばならないものであろう。その他、初期佛教から大乘佛教へと一貫してとらえたところの早島鏡正・紀野一義「無我思想の系譜」(講座東洋思想5、

佛教思想—東京大学出版会、一九六七年第3章)、水野弘元・上田義文・勝呂信静・柏木弘雄「縁起思想の発展」(前同書第4章)も参考にしたいものである。

(七)密教に関しては、梶尾祥雲著「秘密佛教史」(改訂版、高野山大学出版部昭和三二年)の他に、密教思想発生の社会的基盤にも注意をはらった宮坂有勝「インドの密教」(前出講座佛教Ⅲ)があるが、最近には初歩者向きの松長有慶著「密教の歴史」(サーラ叢書19、平楽寺書店、一九六九年)が公刊された。なお金岡秀友著「密教の哲学」(サーラ叢書18、平楽寺書店一九六九年)は要をえているし、ヒンドゥ教の諸神崇拜との関連とにおいて、バッタチャリヤの「インド密教学序説」(B. Bhattacharya: An Introduction to Buddhist Esotericism, Calcutta 1932, 神代峻通訳、密教文化研究所昭和三七年)もかかせない研究文献の一つである。

七

インドの佛教史を研究する場合に、忘れてならないことは、インド周辺の諸地域の学僧がインドの佛教に関して記録したもの、ないしはそれぞれの地の佛教受容の経過を記録したものが貴重な文献的価値を有していること

である。すなわち、まず法顯の「高僧法顯伝」一巻、玄奘の「大唐西域記」十二巻、義浄の「南海寄帰内法伝」四巻などをふくむ中国の文献があげられる。つぎにブ・トンの佛敎史 (Bu-ston, History of Buddhism, tr. E. Obermiller, 2 Vol. Heidelberg, 1931-32) 、ターラナータのインド佛敎史 (Taranatha, Geschichte des Buddhism, tr. A. Schiefner, St. Petersburg, 1869 寺本婉雅訳註、丙午出版社、昭和三年) 、ホータン史 (Lhi yul lun-bstan-pa 寺本婉雅訳著 丁子屋書店大正一〇年) などの一群のチベット史料があげられる。他方また、セイロンの歴史書であるディーパヴァンサ (Dīpaṅśa 島王統史、南伝大藏經第六〇巻) 、マハーヴァンサ (Mahāvamsa 大王統史、前同) などのパリー語史料もあげておかねばならない。さらにビルマのサーサナヴァンサ (Sāsanaṅśa 敎史) やタイのサンギーティヴァンサ (Sāṅgītiṅśa 結集史) も、インドに関しては両王統史の記述以上にできるものがないとしても、それはそれなりの文献学的価値をもつものであろう。

最後にインド佛敎史研究に役立つ辞典ならびに事典をあげておこう。まず注目すべきものに赤沼智善編「印度佛敎固有名詞辞典」(増訂版、法蔵館、昭和四二年) がある。そもそもインドのような広大な土地にあっては、地名や

国名の比定に苦勞する場合が多い。また人名でも時代を異にして数人のものが同一名を名のっていることがある。アシユヴァゴーシャ (Asvaghosa 馬鳴) などはすくなくとも六人はあるといわれている。このようにして考証を必要とする学問に対して、漢・梵の佛典をもとにしてつくられた赤沼辞典はきわめて重要な役割をはたしてくれるものといつてよい。

つぎに、近年、インドの学者がだした「インド史辞典」(Sachchidananda Bhattacharya: A Dictionary of Indian History, New York 1967) をあげておこう。そして、これとともに平凡社の「アジア歴史辞典」(全一〇巻、一九五九—一九六二年) にもふれておきたい。これらは一般史との関連において、佛敎の時代的地域的発展ならびに諸民族の受容の仕方などを幅広く考察するのに役立つものである。それはインド史のワクの中で、さらにアジア史ないしはアジア・アフリカ史のワクにおいて佛敎史学を位置づけようとする、いまの時代の要請に応ずることにもなるであろう。

海外における最近の学界の模様に関する報告によると「佛敎史学」第一四巻第二号、五五頁)、佛敎史学の当面の課題としては、やはり、アシューカの時代とカニシカの

時代であり、関心はその周辺に集中しているもようである。そして、文献学的には、セイロンの年代記、チベット・モンゴルおよび中国資料、中国の求法僧の記録、ピルマの年代記などの重要性があげられており、さらにま

た、つねにあらたなる問題でもある佛教の近代化というテーマに焦点がおかれていることも知られる。このことはまた、われわれ佛教史学に関心をもつものの課題でもあるとおもわれる。